

朝日歌壇俳壇



日高理恵子 (ウメI)

永田和宏選

地震きて元日能登のすまじき逃げて逃げて
のアナウンスの声 (大牟田市) 平野 實
おろおろと櫓の幹につかまりておさまるを待
つこの大地震に (新潟市) 太田千鶴子
すてさんの歌に知りたる朝市の通りの火らし
夜空を焦がす (流山市) 阿武 順子
☆輪島のひと山下すての歌にある震災前のしず
かな暮らし (三鷹市) 大谷トミ子
舳倉島どうなんだ粟島・飛鳥は 津波のしか
かる冬の小島は (東村山市) さいとすみこ
時を経るごとに死者数増えてゆくニュース悲
しき正月三日 (五所川原市) 戸沢大二郎
ノックして部屋に入ってくるまでのドアの向
こうの吾子の逡巡 (奈良市) 山添 聖子
どぶりで量る野田の寒蜩一合二合すぐ売り
切れて (津市) 中山 道治
賞味期限切れし身なりと我が言えは古酒の色
気と言いし人あり (秩父市) 島山 時子
俺と結婚してからどんだん綺麗になつていつ
たとみんな言つてる (秩父市) 浅賀信太郎

【評】元日の平穩を突き破るような「逃げて」の絶叫。新潟の太田さんは、櫓に
縋まって必死に耐えた。能登地方の地震と言ふことで、本欄のかつての常連山下す
てさんを想う歌も多くあった。十首目は、憶気か自惚れか、いや能天気か。

馬場あき子選

国交のなき国からのお見舞いの能登に灯りし
ほのかな光 (横浜市) 一石 浩司
能登地震に募金しにゆく福島復興途上の浪
江町の吾は (福島県) 守岡 和之
図書室でいつも絵本を読んでいた子が箱根路
の一区走りいる (埼玉県) 中里 史子
大東京離れたタヌキ新春の箱根で一眠りして
帰る (安中市) 鬼形 輝雄
☆おにぎりに静かにしみ込む珠洲の塩鈍色の海
の味をかみしむ (枚方市) 唐崎 安子
学童の冬のガラスにはんりのふたつ母を待つ
子の手のひらの跡 (山口県) 庄田 順子
灯のつかぬ工場残る枯野なり倒産家族いかに
なりけむ (鹿嶋市) 加津牟根夫
支持率が一割に満たぬ内閣が閣議で決めるさ
まさまなこと (東京都) 野上 卓
植木鉢退かせば大きカメムシが屋敷してゐた
小晦日かな (戸田市) 蜂巣 厚子
水電気充分ありてもちをかむ能登半島に心寄
せつつ (飯田市) 草田 礼子

【評】第一首は能登半島地震に対し、北朝鮮金総書記から丁寧なお見舞いの言葉
が届いたことにやさしい気分になった喜び。よい関係を築きたい今後だ。第二首、
災害体験を同じくする浪江町からの応援募金。第三首、力走が見える。

佐佐木幸綱選

元日の能登には希な青空に地震に傾く納屋を
見てをり (羽咋市) 北野みや子
長き列の後ろに並び電柱の傾く広場で水を待
つてる (高岡市) 梶 正明
元日の地震と二日の大事故をまとめて載せる
三日の紙面 (相馬市) 根岸 浩一
☆新雪の積もった朝の公園に木と木を繋ぐリス
の足跡 (江別市) 長橋 敦
入口に繋がれている山羊静か動物病院師走の
暮れに (市原市) 笠原 英子
ふるさとが区画整理で消えてゆくいつでも帰
れるはずだったのに (前橋市) 町田 香
天に向かい鳴きおるつがいの丹頂の吐く息白
し釧路湿原 (江別市) 成田 強
電子機器ふえて火のなきキッチン元朝に祀
るかまど三神 (藤枝市) 永野 紀子
猪の肉の塊引つ提げて友頼るどか雪の闇 (上越市) 藤田 健男
冠雪の蔵士の遠く見ゆる朝ペランダに干すシ
ヤツの輝く (仙台市) 小野寺寿子

【評】第一首、揺れつつある傾く納屋。それを見ている作者もむろん、揺れてい
るはず。第二首、二日の朝だろうか。「電柱の傾く広場」が印象的。第三首、元
日、二日、三日と順に並べた工夫。第四首、点々とつづく足跡。下句が楽しい。

高野公彦選

七草の汁盛る椀は輪島塗り想い出の朝市地震
焼き尽す (松本市) 須貝 大二
☆おにぎりに静かにしみ込む珠洲の塩鈍色の海
の味をかみしむ (枚方市) 唐崎 安子
☆輪島のひと山下すての歌にある震災前のしず
かな暮らし (三鷹市) 大谷トミ子
今日もまた夜空に響くへりの音能登への支援
物資の急ぐ (福井市) 野原つむぎ
震災を経験した身は北陸の寒に祈願す一陽来
復 (宮城県) 武田 悟
二秒間迷子になった ステイから戻った母に
「誰？」と問われて (鎌倉市) 半橋 保子
☆新雪の積もった朝の公園に木と木を繋ぐリス
の足跡 (江別市) 長橋 敦
どこにもあるやうな恋どこにもあるやう
な夫婦そして今ひとり (豊中市) 夏秋 淳子
生きて行くために働く人たちを生きて行けな
いほど働かす (京都市) 寺西 和史
紅白の喧騒閉ちて除夜の鐘このしつけさの有
り難きくに (本巣市) 青木 鈴子

【評】一首目から五首目は、全て元日に起きた能登地震関連の歌。現地の被災者
のことを想い、心を痛める。地震は、古語で「なみ」または「なえ」という。「山
下すて」さんは、かつて朝日歌壇で活躍し、あまたの秀歌を残した輪島在住の人。

うたをよむ 雪と氷のうた

北山あさひ

一月下旬、北海道は真っ白な冬の真っ
ただ中。北に生きる一人一人に、それぞ
れの雪が降り、水が光を反している。
流水に遭難したる僚船を救助にゆきた
る船も帰らず 駒板芳夫
僅かなる仮眠に耐える若さあり着氷碎
く掛矢を振りて
我が船は北のはずれのカムチャツカ朝
な夕なにトドの群れ来る
昨年刊行の歌集『我が海の歌』は、か
つて北洋漁業の現場にいた元漁師によ

る、記憶と鎮魂の一冊だ。流水や凍てつ
く寒さとの闘い、大きな自然との対峙
に、心の深いところが不思議と満たされ
ていく。駒板は釧路市在住の九〇歳。
「花形」とも呼ばれた北洋漁業だが、そ
れを知る人ももう少なくなつた。これら
の歌が書き残された意義は大きい。
最後の北洋船が出漁したのが昭和六三
年。その前年に誕生したのが旭川市在住
の塚田千束である。
女にはわからぬと笑む松の幹 ひとり

ひとりの雪庇せりだす 塚田千束
勝ちに行く 踵の雪を蹴り落とし冬に
生まれたたましいだから
塚田の『アスバラと潮騒』は昨年の北
海道新聞短歌賞佳作に選ばれた一冊。男
尊女卑的な社会で女性として生きること
の悔しさや怒り、あるいはそれらを反骨
のエネルギーとして一歩を踏み出す。そ
うした場面に雪が詠み込まれている点に
注目したい。冷たく降り積もる雪は、と
きとして人に寄り添い、勇気づけてくれ
るのだ。
北海道の雪と氷の季節は四月下旬(ろ
まで続く。)

◇朝日俳壇 入選取り消し 2023年1月22日付の
俳壇に掲載した「一声で笑顔とわかる初電話」は、
同一の先行句がありましたので、入選を取り消しま
す。

訂正

1月21日付俳壇の「孤独との付き合ひ方を
日記買ふ」の作者名が「松村敦視」さんとあ
るのは「村松敦視」さんの誤りでした。編集
時に入力を読み直しました。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メデ
ィアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿
は無地のほかき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品
の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 請
海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝
日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があ
ります。